

空き家をどう活用したらいいか？

1	新型「ベッドタウン」 <p>この集落に住んでいて、都市部へ通勤することは可能か。もし可能なら都市のごみごみした所よりも、美しい自然に囲まれ、普段は、都市の人が羨むようなレジャーを楽しむことができる。そこに自宅を構えて通勤に出かけるのは、理想的な生活だ。</p> <p>空き家の持ち主と契約し、都市部の勤労者から入居者を募集する。そうして若い世代が住み着くことで、子どもも増え、「町」の体をなすようになる。</p>
2	お手軽な「別荘」 <p>家を一定期間貸すのならいいという場合、別荘として使う方法もある。すでに持ち主が別荘として時々戻って来ているケースがある。それほど金をかけないで休日にレジャーを楽しむことができるのだから、案外希望者は多いかもしれない。</p>
3	「みなし仮設住宅」 <p>東日本大震災では、被災者は一般のアパートを借り受けて家賃を補助してもらう「みなし仮設住宅」方式を選んだ人が多かった。集落全体を「みなし仮設住宅」地域として開放していくことも可能だ。住宅の整備・補修の費用は、避難民の出る都市部の自治体が負担。災害のない普段は、島の住民が管理し、いろいろな活用できる。</p>
4	中学生の生活体験施設 <p>和歌山県の白浜町で、中学生の生活体験を自宅を開放して受け入れる制度が存続している。空き家を使えば、恒久的に、また本格的に制度化できる。家というのは、ただの施設よりも有利な面がある。水道も家具も、生活に必要な設備は全部そろっている</p>
5	Iターン・Uターン受け入れ <p>今のところ仕事がないから、若者が移住してくる可能性は少ないが、定年退職後に戻って来る可能性もある。ここに紹介した他の企画が実現すれば、若者たちが仕事を求めて移住してくることも可能になる</p>